
春夏秋冬

小田 和葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春夏秋冬

【Nコード】

N2107B

【作者名】

小田 和葉

【あらすじ】

私には同居している恋人がいた。あなたはどこへ行ってしまったの？思い出すあなたとの過去。そんなとき、私の元へ来た一通の手紙。

マフラーと手袋がないと、あんな体に刺さるような風の吹く外に出る気がなくなってきた、この季節。そろそろストーブも出さなきゃ……と十一月中旬から思っていたものの、まだ春に引越してそのままの、あの段ボール箱の山から一つ一つ引繰り返して探すという意欲が出ず、こたつで自分を騙し騙し過ごしていると、とうとう本格的に寒くなってくる十二月に入ってしまった。

寒いのが嫌いなわけではない。むしろ、夏のあまわり付くような暑さのほうが嫌いだ。

ただ、冬の寒さは、一層人肌が恋しくなるから、一人暮らしの冬は嫌いというより好きだけど苦手という感じなのだ。寒い、虚しい、悲しい、というマイナスの思いだけが私の中でぐるぐると渦巻いている。

そして、その思いの先に辿り着くのは、いつも同じで。

……どうして、あの人は、

* *

この部屋には私の他に、私と同じ大学の出身であり、恋人であったトキという男も住んでいた。ご察しの通り、今はいない。というより、最近ではトキという男がこの部屋に本当にいたのかさえ疑問になる時がある。

考えてみれば、彼の私物はここにはないし、唯一彼が買った物といえば、アンティークの置時計。だが、それも今では本当に彼が

買ったのかどうか、自信がない　だ。

トキは、不定期にふらりと私の元に現れて、私を愛し、私に愛され、太陽の降り注ぐ頃に『またね』とほほ笑みを浮かべて去っていき、そんな男だった。そんな男などフッてしまえば良いのに、と言う友達もいたが、私は彼の笑みに時々見え隠れする、孤独感や、淋しさから揺れる瞳がいとおしくて、結局、彼がふらりと現れるのをただ待ち続けた。

そんな彼に同居しないか、と誘われたのは、一年前の冬だった。

「君を傍におきたい。甲斐性なしな僕だけど」

珍しく照れたように少し頬を赤らめて、真剣な瞳で言ってくれた彼の言葉に、私は二つ返事で了承した。

そして春から、私と彼の生活が始まった。

同居前に比べればだいぶ一緒にいる時間が増えたが、それでも彼がこの部屋に帰ってくるのは一週間に二、三度が良いほうだった。

たとえば、夜、一緒に寝たはずの彼が、次の日の朝、私を起こさずにそっとベッドから抜け出し、そのまま部屋を出て、その日は帰らない、なんて事はしょつ中だったし、私も慣れたもので、いつのまにか嫉妬心や疑いの念等といった感情を抱かなくなっていた。

つまり、彼を愛していないのか。答えはノーだ。私の心と体は既にトキしか受け入れられなくなっている。でも、信頼しているのか、と聞かれても恐らくノーだと思う。

私とトキには、愛や信頼等というものより、もっと深い、言葉に

は出来ない感情の繋がりがあるような気がするのだ、少なくとも、私には。

私と彼は、そういう目に見えないものに魅かれ、つながれているのだと思う。

* *

そんな彼も、夏は頻繁に帰ってきていた。一週間に四、五日以上、更に夜だけでなく、一日中家にいたときだつてある。

「今は、君と一緒にいたいんだ」

夏も終わろうとしていた、ある朝。いつもなら私よりも先に起きて、どこかへふらりと行ってしまう彼が、珍しく私と同じ頃に起き、先にベッドから出ようとしていた私の腕を少し震えた自身の腕でつかんだ。そして、その衝撃でよるめいた私を抱き寄せて、トキはそう言った。

震えたような、だるそうな声で言う彼がいつもより弱く小さく見えたが、彼のその気だるさは、私と同じで、夏の暑さが苦手だからだろう、と思っていた。

その日は、彼は私を暇さえあればずっと私をただ抱き締めているだけだった。さすがの私も不思議に思つて、どうしたの？ と何度か聞いてみたが、その度に彼は、ううん……と言つては私の唇に自身の唇を押し当ててきた。彼の触れるだけのキスが、なぜか不安定に思えて、ワケもなく泣きたくなった。

次の日から、彼はまた、一週間に二、三度しか帰つてこなくなつた。ひどいときは、一週間帰つてこない、なんて事もあつた。

そのまま、秋になった。秋になったとたん、彼は帰ってこなくなった。一週間、二週間、と虚しく時間だけが過ぎていく。

彼が帰ってこなくなってから三週間が過ぎようとしたとき、私は私が彼について知っているのは、同じ大学であった事、トキという名前、男、と言うことくらいだけではないか、という事に気付いた。考えてみれば、私は、彼の携帯番号も、家族も、地元も、友達も、もちろん、いつも外で何をしているのかも知らない。今まで話してくれることも、私から聞くこともなかったからだ。

そこまで思考が辿り着いたとき、私は“トキ”という男が存在したのか、急に不安になった。彼の存在は、ただの私の想像だったのではないかと。

……トキなんて人は、最初からいなかったんじゃないだろうか。

そこまで思い出したとき、玄関のインターホンが鳴っていることに気が付き、我に返った。

急いでコタツから出て玄関に行き、はい、とチェーンを外さずにドアを少しだけあけると、そこには知らない無表情の男が立っていた。

「あの……どちらさまですか？」

「……トキのダチ。これ、トキから」

私の問いに簡潔に答えて、彼はずいっと私の目の前にシンプルな封筒を差し出した。ダチ、と言った彼は、それだけ私に渡すと、さっさと帰ろうとした。

「ま、待つて！ …… トキは」

「それ読んだら解る。 …… 一人で読めよ」

目は合わせずに、彼はささやくように言つて、去つていった。

…… トキからの、手紙。

私は、手紙よりもまず“トキ”という男が存在したという事に安堵した。更に、彼にはあのような友達がいるという新たな一面を知つた事にも。だがそれと同時に、彼の事を私は本当に知らなかつたのだという事も改めて悟つた。

しばらく手紙を持つたままぼーっと玄関前につつ立っていた私は、足からくる冷気にハツとなつて、少し足早にハサミを引き出しから取り出して、こたつに戻つた。

封筒には、丁寧な彼らしい字で『実咲へ』と書いてあり、裏面にはトキの名前と、今から約二カ月前 彼がいなくなつた頃だの日付が書かれていた。

丁寧に、まるでガラス物を扱うように慎重にハサミで封筒を切る。チヨキ、チヨキと言う音だけが部屋に響いた。封筒の中には、五枚にも渡る長い長い手紙が入っていた。

一枚目は自分から誘つておいて、置き去りにしてしまった私に対する詫びと、変わらぬ愛の言葉だった。彼らしいシンプルで解りやすい言葉に、ますます私は彼の存在を形づける事が出来た。

二枚目から四枚目には、彼が私と出会う前から関わっていることと、どうしていきなり私に同居の誘いをしたのかという理由が綴られていた。

簡単に言えば、トキは友達　　どうやらさつき来た男の人のよう
だ　　と、私と出会う前から、小さな会社を経営していた友達の父
を死に追いやった犯人を追っているらしい。

私と付き合いはじめた頃から、だんだんと事件の真相が明らかにな
ってきて、私を同居に誘う前、この事件にはある裏組織が関わっ
ている事が分かり、トキはこれ以上踏み込んで命の危険があると
悟ったらしい。

しかし、彼は金のない時に自分を自分の部屋に住まわせてくれた
友達を裏切る事が出来ず、ここまでできたのだから、命の危険があつ
ても、彼と事件の真相を掴もうと決めた、と書いてあった。

それと同時に、自分が大切にしている私の命の危険も悟ったとあ
り、私に同居をしようと誘ったのは、私の実家をその組織に狙われ
ないためだと書いてあった。もし私の身が危険になり、この部屋を
出ることになっても、私の帰れる場所がなくならないように、とい
う彼の配慮だったのだ。

そして、最後の手紙には、こう書かれていた。途中私は、彼への
様々な思いから溢れた涙で、文字がにじんで見えて、スムーズに読
み取れなかった。

この手紙が届く頃、僕と友達は事件の核心に迫っていると思う。
もし、この手紙を受け取ったのなら、どうか早急にこの部屋を出て
ほしい。そして、新たな恋を見つけ、実咲には幸せになってほし
い。今まで、縛り付けていて本当にごめんね。

それから、この手紙は誰にも見られずに燃やしてほしい。この手
紙には重要な事は書いていないつもりだけど、念のために。君の命
だけは助けたいから。

最後に、もし、君がそれでもこんな僕を必要としてくれているの
なら、君の実家の部屋の窓に、唯一僕が買った、あの置き時計を飾

つておいてほしい。外から見えるように。もし、僕が無事に帰れたとき、君の部屋にそれが飾ってあるのが見えたなら、僕はずっと君の傍にいよう。置くかどうかは君の好きにしたらいい、僕は君よりも友を選んだ男だけど、そんな僕で良いのなら。
実咲、今まで本当にありがとう。

私は彼の言った通り、手紙を燃やし、出来るだけ早く部屋を出て家に帰った。親はいきなり帰ってきた私を少し不審な目でみていたけど、深くまで問い詰めようとはしなかった。

私の生活はまた、彼と出会う前に戻ったのだ。

マフラーなしでも外へ出られるくらい、暖かくなった頃。居間でテレビを見ていた私は、ある事件が解決した、というニュースを聞き、思わずテレビのボリュームを上げて、ブラウン管を見つめた。淡々としたアナウンサーの声が頭に響く。

……トキの言っていた事件だ。

ニュースによると、警察庁に匿名で事件の全貌が書かれた文書と、証拠となる資料が送られてきたという。犯人の組織は容疑を認めているらしい。ここまで調べ上げられ、証拠まで出てきていては、認めるしかないだろう、とスタジオのジャーナリストが言っていた。

私は確信していた。もしかしたら、この文書を送ったのは、彼ではなく、友達かもしれないという可能性も十分にあるのに、心の中は彼は生きているという不思議な自信に満ちた。

そんなとき、ドラマのようにタイミングよく、家のインターホンがなった。回覧板かもしれない、化粧品の勧誘かもしれない。

それでも、私は胸の奥からふつつつと沸き起るこの気持ちは、深いところで彼と私を繋ぐ感情だと確信していた。

……ドアの向こうに、私の中で騒ぐこの気持ちを受けとめてくれる、穏やかなほほ笑みが、きつと。

実咲の部屋の窓に置かれた、ここの雰囲気似付かわしくないアンティークの置時計が、窓から差し込む太陽の光でキラキラと輝いていた。

終わり

(後書き)

背伸びして書いた作品です。まだまだ描写があいまいでグダグダで
すが……。

良ければ、アドバイスを頂ければ、嬉しいです。

それでは、最後まで読んでくださって有難うございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2107b/>

春夏秋冬

2011年1月15日20時43分発行